

# Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.12 December 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

12

## CONTENTS

- ・巻頭言  
ネイティブ宗教学としての天理教学  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・文脈で読む「身上さとし」(4)  
増野正兵衛：おさづけを戴くまで②  
／深谷 耕治 ..... 2
- ・伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”  
で— (38)  
天理教教義翻訳の諸相⑤  
／成田 道広 ..... 3
- ・イスラームから見た世界 (22)  
カイロの日常—天理参考館の現代エジプト展—  
／澤井 真 ..... 4
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (11)  
鳥の言葉がわかる？  
／中 純子 ..... 5
- ・ヴァチカン便り (59)  
「世界平和の祈りの会」の閉会式で講話  
／山口 英雄 ..... 6
- ・ニューヨーク通信 (15)  
アメリカの中間選挙  
／福井 陽一 ..... 7
- ・思案・試案・私案  
「碍」の字表記問題再考 (22)  
仏教にみる障害者像  
／八木 三郎 ..... 8
- ・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』  
に学ぶ (8)  
第3講：139「フラフを立てて」  
／岡田 正彦 ..... 9
- ・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』  
に学ぶ (8)  
第4講：108「登る道は幾筋も」  
／八木 三郎 ..... 10
- ・図書紹介 (132)  
Friedrich von Schelling 著 深谷太清  
他訳  
『〈新装版〉シェリング著作集 第2巻  
超越論的観念論の体系』  
／堀内 みどり ..... 11

日本南アジア学会第35回全国大会に参加／2022年度第2回伝道研究会(10月20日)／宗教倫理学会第23回学術大会に参加

## 巻頭言

## ネイティブ宗教学としての天理教学

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

文化人類学では、文化を解釈する時の異なる枠組みについての議論が時に応じてなされてきた。実証主義と解釈主義、エティック(etic)な視点とイーミック(emic)な視点、「経験に近い(experience-near)」概念と「経験に遠い(experience-distant)」概念といったペアの用語が指し示すのは、文化の解釈における認識論的問題であったと言える。

エティックとイーミックの概念は、音韻論の音声的(phonetic)と音素的(phonemic)の対立概念を文化現象全般に当てはめたものである。エティックな視点は、どの文化にも適用できる概念を用いて、文化を外側から客観的に分析し、異文化間の比較を可能にする。イーミックな視点は、当該文化固有の概念を用いて内側から文化の意味体系を分析する。一方、「経験に近い・遠い」概念とは、解釈人類学者のギアーツの提唱した対立概念である。経験に近い概念とは、例えば、病人が自分の感じたことを言い表すためにごく自然に用いる概念(痛みや不安)であり、経験に遠い概念とは医師や宗教家が自らの目的を達成するために用いる概念(診断や悟り)である。ここで解釈人類学が目指したのは、両概念の対立を乗り越えて、そのいずれにも回収されない形でより良い文化解釈を行うことであった。

これらの対立概念が指し示すのは、解釈する者がどのような場所から対象に対して視線を投げ掛けているのかという問いであると言っても良い。この認識論的問題は、近年のネイティブ人類学の動向とも関連している。ネイティブ人類学とは、それまで調査される側であったネイティブが、人類学の領域において、自らの言葉で自らの文化を語ろうとする動きである。インフォーマントの立場に陥ることなく(調査者と被調査者というコロナルな権力関係は頑強なものである)、ネイティブ

であることを放棄せずに(西洋の学問的言説を身につけることでネイティブの視点を失う危険性は常に存在する)、自らの文化について自らの言葉で語る作業は、想像以上に困難なものだ。自文化の解釈と翻訳において、ネイティブであり人類学者であるという困難性を認識し、それを乗り越える作業が、ネイティブ人類学の確立には不可欠なのである。

天理教学が今のところネイティブ(天理教の信仰者)が自らの所属する文化(天理教)について研究する「学問(ディシプリン)」であるとするならば、それが誕生の時からネイティブ人類学の抱える困難性と同種の困難性を内包していたはずである。ならば、天理教学においても、非信仰者のエティックで経験に遠い視点と信仰者のイーミックで経験に近い視点という相対する枠組みを操作的にでも設定し、両者の背反性を乗り越える理論の構築が試みられるべきだろう。

ところで、私は、この度おやさと研究所長に就任し、しばらくの間、天理大学国際学部の学部長と兼任することになった。専門は文化人類学で、地域としてはポリネシア、特にハワイについて研究してきた。天理教についての書き物もあるが、天理教学プロパーの研究者ではない。しかし、一信仰者として天理教を研究する時、天理教信仰者であり人類学者であるという自分の研究者としての立ち位置について自省的でありたいと思う。かつて「元初まりの話」の表象論を論じたこともあるが、天理教学における認識論的問題を指摘したものの、詳細な論考は棚上げにしたままだった。この度の就任により、「ネイティブ宗教学」としての天理教学の可能性について考える機会を与えられたと考え、そのテーマでしばし巻頭言を書き連ねたいと思う。